



阿賀野市立 笹神中学校

◆学校データ

【学級数】 8学級

【生徒数】 133人

【地域コーディネーターの有無】 無

地域や人と関わる体験活動を通して、共生の心を育む

1 はじめに

当校の学区は、五頭山を背景に64の集落が点在する純農村地帯である。五頭山の麓には、出湯、今板、村杉の三つの温泉地があり、観光にも力を入れている。

生徒は、自然環境に恵まれたこの地域を誇りに思う半面、地域に将来について考え地域活動に主体的に参画していこうとする意識は低い。将来的に阿賀野市(笹神地区)で就職・生活していこうと考えている生徒も少ないと考える。保護者・地域からも、「市内にどんな仕事があるのか子どもたちに経験させてほしい。」「地元よさを改めて知る機会をぜひつくってほしい。」という要望があり、将来の地域を担う子どもたちへの期待は大きい。

2 取組の実際

当校では、地域教育プログラムの中核に総合的な学習の時間を位置付けている。総合的な学習の時間では、「地域や人と関わる体験活動を通して、共生の心を育み、自分の考えを表現できる生徒」を目標の1つに掲げている。そして、各学年のテーマを次のように設定している。

- 1年生…郷土を知り、職業を考える
- 2年生…郷土を体験し、将来を考える
- 3年生…郷土を比べ、進路を考える

(1) 全校完歩の取組(縦割り班活動)

毎年、5月に実施している行事である。学校をスタートし、五頭山の麓の自然の中を縦割り班で声を掛け合いながら歩き抜く。約22kmのコースである。新年度がスタートして約1か月が経った5月にこの活動を行うのには意味がある。この活動を通して、3年生はリーダーとして、2年生は先輩として、1年生は中学生としての自覚をもつことをねらいとしている。1年後は、先輩たちの姿を思い出し、新たな目標をもちながら再びこの活動に臨む。この流れが伝統として引き継がれている。

そして、もう1つのねらいは、地域を歩く中で、地域の自然の魅力を体感することである。

令和元年度は、PTA会長がこの活動に関するチラシを作成し、校長とともに地域の施設やお店、事業所等に配付した。このこともあって、当日は、市の教育委員会の方々や近隣の小学校や保育園の子どもたちが、沿道で応援する場面があった。また、地域の方々が家から出てきて声をかけてくれる場面もあった。地域とのつながりをより実感できた活動となった。

(2) 職場体験の取組(2年生)

毎年、2年生の生徒が行っている活

動である。阿賀野市内の各事業所で、2日間、職場で働くことを体験する。生徒が体験する職場は、笹神地区だけでなく阿賀野市内の様々な業種に依頼している。体験するだけでなく、様々な仕事の内容や体験した感想、そして、それぞれの仕事のやりがいについて学年全体で共有する。

令和元年度は、全24か所の事業所で活動を行った。少しでも事業所の方々に「貢献する」ことを目標とした。

活動を通して、生徒は、地元阿賀野市の産業について理解を深めることができた。また、実際の仕事を体験する中で、それぞれの仕事の華やかな表の部分だけではなく、掃除や地道な準備など働くことの厳しさについても学ぶことができた。そして、それぞれの職場にやってくるお客様に対応することを通して、明るく爽やかにあいさつをすることの大切さについても学ぶことができた。

職場体験を終えた後、体験を通して学んだことをプレゼン資料にまとめ、学年内で共有した。生徒は「なぜ働くのか」という問いを掲げ、自分たちなりにこの問いに対する答えを考えた。「お客様の笑顔が見たいから」「地元貢献するため」「自分自身が成長するため」というように、生徒それぞれが様々なとらえ方をしていた。

事業所からももらったアンケートでは「挨拶が素晴らしい」「職場の雰囲気良くなった」など多くのお褒めの言葉をいただき。生徒の励みとなった。

3 成果と課題

及び本実践で育成された資質・能力

全校完歩後の生徒の振り返りでは、「疲れていたけど、全く知らない人に声

をかけてもらって元気が出た。」「自分たちのあいさつが誉められて嬉しかった。これからも元気よくあいさつしようと思う。」といった肯定的な記述が多く見られた。活動を通して、生徒は、地域のよさを実感するとともに自分たちが地域から大切にされているという思いを高めることができた。

2年生の職場体験では、単に仕事のやり方を教わるだけでなく、仕事のやりがいや喜びという、まさに「生き方」について学ぶことができた。地域の方々と交流する中で、働くことの意味を見出すことができたと考える。

4 おわりに

地域の方々に教えてもらう、助けてもらうという一方通行だけでなく、生徒から地域の方々に提案したり、奉仕したりしていく活動も同時に盛り込んでいく必要がある。生徒が「地域の一員」であることを自覚し「地域と共生」することのできる活動に発展させていきたい。